

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

|            |   |
|------------|---|
| Title      | あるものへ : 小説  |
| Author(s)  | 永積, 安明  |
| Citation   | 龍南, 205 : 75 - 85   |
| Issue date | 1928-02-25  |
| Type       | Departmental Bulletin Paper   |
| URL        | <a href="http://hdl.handle.net/2298/8993">http://hdl.handle.net/2298/8993</a> |
| Right      |   |

# あ る も の へ

永 積 安 明

ほとんど一月ばかり私はだまつてゐました。あなたの御手紙はその間に三回も私の机を訪れたのです。それにも拘らず私は返事も致しませんでした。かうしてゐるうちに三月も四月もすぎ去つて、私はたゞ山峽（やまがせき）の沈黙（しんもく）の様におし黙つたまま何もかも忘れてしまうのかも知れません。正直に言へば忘れてしまひたかつたのです。私の友達に記憶が急に減退して悲觀してゐる男がゐます。しかし一体私達がおぼえてゐるものに何があるものでせう。私はその男を羨（うらやま）しく思つてゐる位です。何も忘却の谷川へ洗つてしまつたら、これ程愉快な事はないでせう。けれど、かう云ふ世界は死ぬることより外には求められないのかも知れません。私の坐つてゐる前に古い沙羅の木がゆらめいてゐます。かう云ふ一本の樹木さへ生みつけられたものは、そのまま生きるより外はない様です。誰かが人間の興へられた最大な幸福は自殺しうることであると云つたさうです。私にもその心持がわかる様な氣がします。私たちは生れてしまつたのです。生れると云う事それ自身何と云ふ不思議なこととせう。丁度あなたがAの池に立つて葦の葉を凝つと見てゐた時、ひよつこり私と會つた様に、いやそれ以上に不思議な氣がするのです。

あ、今かくれてゐた夕陽が庭に入つて椿の葉が重鈍い色を燦々と輝やかし始めました。雨のあとの葉が限りなく美しく落着いて、而も本當の色をしてゐることをあなたは、始めて私に教へた人です。今から三回の手紙の返事にしては長い位の返事を書きませう。

私は小さい時から日記をつける事を知つてゐました。始めは小學校の夏休みなど、先生の命令で書いてゐたのですが、いつか日記をかかないと氣のすまないやうになつて來ました。日記の面白さは古い記憶を辿りかへすばかりではないのです。大抵の人

が後のために書いてるのを見ます。併し私にはさうは思はれません。夕方になつて、空氣が何か、ゆつたりと落着いてくる時、あの白い頁を開くと、自分の鏡に向つてゐるやうな氣がするので。私はあの白い頁を愛してゐます。何も書いてないまつしろい一枚の紙を——。ふつと開いて頁が例へば五月だつたとしますか。又十月なら十月。二月なら二月。紙の香が忽ち私を過去と未來と、いや時間を越えた一切へ引ずつてゆくのです。まづ自分は昨年その月を思ひかへします。それから今年の、來年のその月のその日は、一体何を書かれるのだらうと思ふのです。どんな運命が待ち伏せてゐるか？ひよつとすると誰かが私には見えない字で、その月その日に行はれるはずの私を書いてゐるのではないか、一体私はその月までに何を考へ何を努力してゐるのだらうか？總てはきまつてゐる！かうして私が日記帳の白い頁をめぐつてゐるとまだ來ない恐怖とも寂漠ともつかない感情で一杯になつて來るのです。葦の葉の池のほとりで、凝と眺めてゐるあなたもすつかり書いてあつたのかも知れません。

が、私は何か外の事を云つてゐたやうです。そうです。生れる事が不思議だと云つたのでした。私は今日今までいつた事もない事實をすつかりあなたに打あけなければならぬのです。けれど、それは驚かないでいい事です。一つの事實で、それ以上、何でもない事ですから——。

私の小さい時はあなたには御存じない筈ですが、ひどく頭でつかちの、憂鬱な、ひよろひよろした童兒でした。だれでも私の頭を撫でて、「可愛い。」とは、云はない子供でした。大人も何か恐れる様な妙な河童坊主です。一体かう云う子供は近所の童兒から嫌はれるのは當然です。私も御多分に洩れないで滅多に外へは出なかつたものです。その代り家の中ではすばらしい暴君で或日相撲を見た歸りなどは、自分が行司になつてでつかい頭をふりふり、父と母に相撲を取らせようと云ふのです。これには父も母も弱つた様です。かう云ふ暴君ですから仲々人に負けてゐません。その頃珍らしかつた蓄音機を聴いて父の留守に中をこつそり開けて見たのもこの河童坊主でした。あの舊式とはいへ、複雑な蓄音機の螺線を全部解いて中から人間が——殆ど超人に近い英雄が飛出すかと思つたら何も出てこない所か丁度役所から歸つて來た父のひどいお目玉を戴いたのです。この時の心細さと云つたら、蓄音機からは、だまされた様な氣がするし、父からは叱られ、母は相手にしてくれないし、あの薄暗い夕闇の中に座

敷一杯にちらかつた針や螺線などをみながら涙も出なかつたのです。不思議なもので、あの時の寂しさは今でも時々自分にめぐつてくる様です。机の上に一杯に積つた限りのない書物を見、一体何を發見したのか。そうして今迄の努力は何になつたのか？かう思ふと、あゝそれもほのぼのと日の沈む灯ともし頃などであればある程佻しい氣がするのです。丁度蓄音機の中に超人がゐなかつた様に堆高い書物の中にも超人はゐないのではないか？日の暮近く田舎の一本路を歩いてゐると、いくら行つても一本路で果しがない。命を直視してゐる様な、はかなさがふつと起つて來る事があるでせう。あれです。ああ云ふ氣持が、まるで循環小數を計算する様に、休み休み限りなく起つて來るのです。

蓄音機のエンヂンにかこまれた頃の私は今でも私の心の中に残つてゐて時々頭をもたげるのです。この頭でつかちの童兒は父に叱られて、涙も出さないで母の床にもぐり込んで了つたのです。どうしても泣けないのです。けれども子供の事ですからやがて眠つて了ひました。明日の朝起き上るともう父は居ません。いつもの様に役所へ出て行つた後で、日あたりのいい縁側で母は何か縫物をしてゐた様です。

「幸ちゃん。」

「なあに。母さん。」

「父様がね」

「ううん。」

「父様が幸ちゃんが蓄音機を壊したのだから、幸ちゃんが自分でなほすんだと仰言つたの。」

あ、幸ちゃんはまだ蓄音機をそのままにしておいた！けれどその晩になると、頭の大きい童兒は昂然として獨り、シューベルトの子守唄をかけてゐました。その頃まだ流行りもしなかつたシューベルトの子守唄を！どうにか機械を組立てて了つたのです。私は父が驚いて頭を撫でて、「かしこかつたなあ！」と、云つた顔を覚えてゐます。父の顔にはありありと私を怖れる色が現はれてゐました。私はその時いつもと變つた父に突然憎惡を、と、いふよりは輕侮に近いものを感じました。勝負に勝つた子供の

様に、と云うよりは、アルプスから伊太利を眺めたナポレオンの様に私は父の顔を凝視してゐました。父が私を恐れたのは當然だと思ひます。私の顔は父によく似てゐました。父も頭でつかちの方ですから。けれど——ああ、この事を云ふ前に、も一つ私の幼時を憶ひ出して見ませう。その方が今の私を一番よく知つてゐるあなたにも、この私がどんな風に生長して來たかどうと判然するでせうから。

・かうしてゐる内に夕陽は殆ど入つてしまひました。いつかあなたと話したB丘の上枝<sup>オウエ</sup>にかすかに残つてゐる光だけです。一体あなたの三回の手紙には一回一回ちがつた姿を見せてゐますね。私にはよくわかりますよ。第一回のと第三回のそれとの隔りの大きさが私には目に見る様に明らかです。あなたは今少し痩せてゐるでせう。ペンがそれを語つてゐます。第三回の手紙を書く時あなたは泣きながら書きましたでせう？こんな事を尋ねるのは不躰かも知れません。が、私の言葉は確かにあたつてゐるはずですよ。それから、私が何も包みかくさない様にあなたもみんな私に話して下さるにきまつてゐますから、そういつたのです。あなたは唯その時を大きくうなずいてみせるだけでせう。きつとそうです。けれど、あなたのことは、あなたが第四回の手紙、第五回のそれに、そう云へば、もう第四信が私の病氣でないかを疑つて私の所に來る頃です。恐らくこの手紙とすれちがつて來るのでせうが——一寸返事を出さないとあなたは病氣を製造する名人です。而も病氣はいつも自分一人がせおつて歩いてゐるくせに。が私は私の話をつづかせよう。あの頭でつかちの童兒は、相變らず我家の君主だつたのです。特に、母はその奴隷に近いものでした。この童兒の御馬はいつも母が氣の毒にもなつてくれたのですから。その頃この單調ではあるけれど、先づ平和な家のすぐ先に、同じ役所に出る長官の一家がひつこして來たのです。家の母はその時以來、前の一家の女の人と愉快に話す様になりました。一体明るい性質の母が時々、め入り込む事は、その爲殆どなくなつたと云つていい位です。

此の童兒も母にくつついて一度その家の庭で遊んだことがあります。庭には大きな池があつて、金魚や鯉がまひるの光を水底に吸ひ込みながら、或は悠々と浮び、或は苔の虫を食べながらいそいそと三三尾づゝ泳いでゐるのもあるのです。妙な鳥がゐて頭をつついたので、まつ青になつたのもこの時です。七面鳥をこの時始めて見たのでした。何も彼も新しく、すばらしい光で一杯で

した。かう云ふ庭にこつそり入つては楽しんでゐたのです。誰もとがめるものはありません。ま夏のあつい光を一杯に浴びて駆けまわつたあの時は實際愉快だつたに相違ありません。之ればかりでなくその家に一人の友人が待つてゐました。私が十才でしたから、やはり九才か十才位の女の子です。それがこの頭でつかちの入る毎ににこにこ笑つて出て来るのです。この童女はおつとりとした無邪氣な子供でした。それから又、田舎には知られてゐない珍しい玩具だの、面白い遊びだのを知つてゐました。クリスマスと云ふ言葉を覺えたのも、サンタクロースの遊びを覺えたのもこの時です。童児はサンタクロースで童女は一年中おとなしかつた子供です。童女が庭の楠の木蔭に眠つてゐると童児はにつこり窓から入つて来る遊びです。頭の大きいサンタクロースは、これも又大きい袋をかついで楠の木蔭に来るのです。童女は、これは、いかにも眠つてゐますと云ひたげな顔を少し傾けてほそぼそと寢息をたててゐます。

「これからどうすんの？」

「いやあよう。それから袋を下して靴下にいれるの。」それから又始めからやりかへです。

ミーン、ミーンと蟬が鳴いてゐる大きな木の蔭で、サンタクロースになつた童男と、お嬢さんになつた童女とは、何回も何回も同じ事を繰かへすのです。お嬢さんのお母さんがひくピアノの音が、ものうく、ものうく、耳に入る午後三時。光がしんと庭中をおさへつて、池の金魚も、それから、もう恐ろしくない七面鳥もこそとも云はせない時、あ、この童女も童男もひつそりと汗ばんで、サンタクロースの人形を間にぐつすり一時間の眠りをむさぼるのでした。私はあのむせるやうな大氣を今でも感ずる事が出来ます。朝、眼が覺めると、一番始めにその庭をこつそりのぞいて見るのです。七面鳥がかさこそと餌をあさり、時々池の鯉がはね上つて、硝子戸に空しい反響を起させるより外、まだ眠りからさめきらないあの廣い廣い庭を――。

かう云ふ日が一月も續いたでせうか？

そのうちにあの童女はおつとりとした姿を、藤棚の下や、楠の木蔭に見せなくなりました。頭の大きい小僧は、毎日門の前に立つて一時間も二時間も待つてみたり、小さい木戸からそつと入つてみたりはかない希望をつないでゐたのです。

夕焼で雲が一刻一刻、變化して美はしい姿態を見せ始める頃、待ちながら——はかなくも童女を待ちながらちつと立つてる童男は。而もその童男は頭でつかちで、愛敬もなく、眼は、大人じみて鋭く、ちつと雲をみつめてゐる。ああ、この子こそは——あのいきづまる様な午睡の時、呼びさまされた子供達は、豫期もしない大叱られをしたのです。こんな事を教へる子と遊んではいけません。眠たげにはれた眼をさすりさすり行つて了つた童女。教へもしないのに教へたと云はれた不公平と、これから御菓子でもさらはれた時のようなあつけない不満とに、一杯になつて歸てから殆ど一月のあひだ、ひよつと出て來るだらう出て來るだらうとひそかに待ちまうけてゐたのです。

かう云ふ童男も私なのです。

あなたは今の私に、こんな蔭が、こつそりと、しのんでゐるのがわかりますか？ まだまだ色々な蔭が私には残つてゐる様ですあなたは、私の明るい一方ばかりを見てはいけません。忘れないで、氣を付けて御覽なさい。どんな蔭が私にはゐるかを。

全く陽が入つて電燈がつかしました。こんなに黙つてゐて、まだあなたの第四信のくるのを心待ちに待つてゐるのは、どうしたものでせう。何かかう物足りないこの心持は——。

いつもなら日記張と對話する頃です。なつかしい空氣が流れる頃です。

白い眞が私に物を云ひ、「貴様はこの中にある。」とう云つてゐるのを聞く時です。けれども、私はまだあなたと話してゐたい。それよりもあなたに云ひたい事が残つてゐるのです。これを申上げてからあなたの病氣製造のお便りを待ちませう。

十二才の時ですから、ずい分以前の事です。私の母は死んで了ひました。私はその時確かに泣いた様です。十二才にもなつてゐましたから少しはわかつてゐたのでせう。

十二才まで一所にゐた母を、母の姿を、いろいろ思ひ出すことが出來ます。かう言ふ母はいつもきまつて快活な笑顔です、が一つ、たつた一つどうしたものか暗い顔を覺えてゐます。その暗い顔は私にも不思議でした。私は今まで、私をちつと眺めて涙ぐむ母を、その細い肩のひどく震へたのを不思議に思つてゐました、それはやつと此の間わかつたのです。

そう云ふ母の顔を見、そんな風に見られると小さい私も何か頼りなくて泣きたくなるのですが――。

頭でつかちの坊主が、蓄音機を不思議にも修繕した時、何か怖れに似た顔色を父に見出した事は既に申上げました。そして、小さい坊主の勝ち誇った姿も。

父は何故あんな顔をしたのでせうか？私は又何故いつもに似合す昂然と誇つたのでせうか？私は今になつて初めてそれを知りました。

いつか虫ぼしだから、行けないと云つた手紙を出した事がありましたね。

十月の初め頃、その日はすばらしい天気では家の食事や洗濯をしてくれる老婆と二人で、古い着物を張り切つた網の上に掛けたり、古い和綴ちの書籍を日にあてたり、それから又老婆の昔話に耳を傾けたり、一人で日向ぼっこしたりして、一日中、秋の日を楽しんでゐました。特に母の着物や道具は私の眼をひきました。そう云ふ古いものの中に、頭でつかちが、ひよつこり現はれてくるからです。七面鳥も童女も夏の日の桶もまぶしくなる様に次から次へ現はれて來ます。

「何か箱がございます。」

老婆が渡してくれたのは古い手箱です。私は不思議に思つてそのもう大部色のあせた蓋を拂つてみました。これまで言へば、もうおわかりになるでせう。日記帳です。母が何年か書き集めた細い字の日記帳です。併しもうこれも捨てられた部分が多いらしく割に平凡な所ばかりが残つてゐるのでした。それでも母の生活をよく知つてゐる私には、それが非常に面白かつたのです。

例の快活な氣象が筆にもよく現はれてゐました。絶えず何か一日の面白い事件をとらへてあります。この中に何日か全く缺けてゐる所がありました。而も初めはあつたらしく紙の裂かれた跡さへあります。と、一葉の手紙がバツと私の膝の上に落ちて來たのです。おや、これは…………。

私は忽ち了解しました。もうはつきり言つてもいいでせう。驚かないで下さい。私は母の子です。けれども父の子ではないのです。さ、次を讀んで下さい。



これが事實なのです。これが――。

私は一度日記をよみ返しました。讀んで行けば行く程それがはつきりわかつて來ます。ああ、そうすれば、母の私を抱いて物言ひたげな眼のうるほひ…………。

ふつと寂しくあちらを向ひて了つた母の後姿。ああそのうしろ手のほそり。手紙の裏にかかれた文字で私は私のほんとうの父を知りました。私と同じ名の父を――。

暖い夕陽を一杯に浴びて、小さい手箱を抱いてゐるうちにぼろぼろと涙が落ちて來ます。何故だか何故だか知らない涙が熱くほほをつたつて行くのです。手傳ひの老婆さへゐなかつたら私は目がくれるまで、そこに座つてゐたに相違ありません。これは一体どうしたのだらう。自分は一体何だらう。そうしてこの涙は何のために出るのか？ 私は自ら反問して見ました。不平なのか？ いやいや。母にあざむかれたと思ふのか？ いや決して。一つの聲がかう答へます。それでは一体何の涙だ！。

私はびつくりしてゐる老婆に、ものも言はずさつさと床をしいて夕飯も食はずに、その中に入つて了ひました。眞暗い床の中に頭をつつこんで、私は母を憶ひました。まだ見ない父を想ひました。と云ふよりは何か頭の中が一杯になつて、父と母と、それから又えたいも知れない色彩がごたごたと交又して唯、涙が電燈をつけない部屋の靜かさにポトポト落ちるのを知つてゐただけでした。どうしてこんなになつたのだらう。私は思ひました。そしてこの佻しさは一体何から來るのだらう。

母がまだ私の幼い頃、時々その眼をほのぼのと悲しくしたのを私は懐ひ出しました。そうしてその佻しさとこの悲しみとが全く同じものだと思ふ事をやつと知つたのです。

丁度私の日記が白い様に母の日記もその頃は白かつたのでせう。そうして何も知らない頃の若い母は、快活で、白白とした眞さへ氣に掛けなかつたに相違ありません。

あ、今、夕食をすました父が書齋で新聞に目を通してゐます。私はあなたにこれだけの事をかくしてゐました。かくすと云ふよりは申上げなかつたまでです。かう云ふ事が明らかになつた私をあなたはどう思ひますか？ 今はいつの間にか頭でつかちでな

くなつた私にも、やはりその父と母との子供である事はまちがひありません。そう言ふ私にあなたは第四信を急いでゐらつしやるのです。恐らくあの小さい机の上に心待ち首を傾けながら――私はみんな申上げました。何だか心がおちついた様です。

私の今の氣持は落着いてゐます。父と母三人を思ひますとはかない氣がする事もあります。けれども私は誰を憶ひませう。誰が母を批難しても私は母を庇ふでせう。おゝそれが、あなたであつても、私は母を庇ひます。私は母を知つてゐるからです。母を知つてゐるのは、私と、ほんとの父と二人しかゐません。

父と母とは私に生命を與へて呉れました。それに對して私は何を言ひませう。それは事實なのです。私ばかりでなく、恐らくあなたも同情して下さるでせう事實です。私はレオナルドの母をおもひ出します。私の母を、レオナルドの母に比較すると云ふより、自ら<sup>オツカ</sup>關聯してレオナルドを想ふのです。あのすばらしい天才は何の力でせうか？、レオナルドは、私の母と同じ境遇の母をうらんだでせうか？、いいえ、私はそうではないだらうと思ひます。レオナルドの天才は母から與へられたのです。と同時に父からの大きな賜物であることをも忘れたくないと思ひます。レオナルドの母こそはすばらしい母だつたに相違ありません。彼は、其の母に感謝し、その偉大な力を振ひ起したに相違ありません。その時は生れた事實以上だつたと思ひます。あなたはそう思ひませんか。マリアはいつも處女でなくてはなりません。それは虚構でなくて本當なのです。私にはそれがはつきりわかります。ラファエルのマドンナはすい分清淨です。私はラファエルは好きですし、そのマドンナも類のない清さだと思つてゐます。けれども、私の畫くマリアは、レオナルドの母とあまり代りがないのです。やさしく、清淨で、而も何か素朴な香氣にみちみちたレオナルドの母と。

レオナルドが母に感謝した様に、私も母に感謝したいのです。私は母に甘へ、母は私に甘へていいのです。もつともよく知りあつたものでなくては清淨な甘へは出来ないものです。私も母には甘へる事が出来ます。母も又私に甘へる事が出来るです。甘へ甘へられるもの程幸なものがありませんか？

あなたは、こう云ふ私に驚きますか？いいえ、決して驚かないで、もういつもの様に、にこにこ笑つていらつしやるでせう。

そうして又あなたも私の母に甘へうる一人ではないでせうか？この推察が誤つてゐない事を確信してゐます。私はあなたの返事を待つ必要さへない様です。

もうあたりは眞暗です。遠街から犬の吠える聲が時々聞えて来る外、父の頁をめくる音が聞えるばかりです。

この父に私が昂然と傲つたわけもありました。

けれども、もう白い髪の非常に多くなつた父を見ると、氣の毒になつて来るばかりです。父は恐らくこの事實を知つてゐるのではないでせうか？、知つてゐながら、黙つて私をみつめてゐてくれたのではないでせうか？、あの虫干も私にこの事實を知らせるためだつたかも知れません。毎年の虫干にあの手箱がわからない筈はありませんから。而も私が、それを知つても十分な年齢に達してゐることを知つた親切ではないでせうか？、

この想像はあたつてゐないかも知れません。けれども兎に角、私は今の父を尊敬することが出来ます。

レオナルドの父と母の様に、私は父と母を見、今又この父には何かおそかな心持を持つことが出来ます。

今、父も新聞をよみおへたようです。これから私と父はいつもの様に三十分か一時間、落着いた話をします。

私も今日は日記をつけないでまづ白に残しておきます。かう言ふ日は言葉のない方がふさはしい様ですから。そうして又、白い頁をバツとあけて見ませう。過去と未來とをつなぐ今日の頁も、やがてよき追憶を與へてくれるのかも知れません。

あなたは、今の寂しい父を今迄の様に、ほんとうの父だと思つて下さつてもいいのです。唯、私がこう云ふ事實から生命をあたへられ、かう云ふ風に大きくなつたと云ふ事さへ知つてゐらつしやればいいのです。今でも、私の眼には葦の葉の中にあなたの姿がはつきりうつります。

思へば父も母も、はるかに歩いて來たものです。そうして今度は私たちの時代です。私たちの時代は果してまだ書かない日記の頁の様に冷い光をたたへて待つてゐるのでせうか？、併し私たちは、どうにもならない事實は、そのまま認めるより外ないのです。葦の葉を凝つと見てゐらつしやつたあなたのやうに。そして又それを見た私の様に――。

今、父が呼びました。私はあなたに、この手紙を見てどんな變化が起るかを考へたくありません。唯、いつも人の病氣まで肴おひたがるあなたのくせ？がやむことを望んでゐるだけです。ほんとうにからだを大切にしませう。何か力が満ちて来るやうです。書き初めの暗い氣持は全くなつて了ひました。今から父と快活に話せます、父の笑ひ顔は私の喜びです。さ、それでは今日はこれまでにします。第四信がもう待どほくなつて來ました。おやすみなさい。さよなら

×

×

×

×

×

×

ふとした機會で僕はこう云ふ手紙を見た。そして、この若者は果して見てならないものを見たのかどうかをさへ疑はなかつた。それほど僕は明るい感じを受けた。その若者がレオナルドを引合に出したのは、實にほほえまれた。そしてレオナルドもレオナルドの母も、この手紙を見たらやさしく微笑むであらうと思つた。

(一九二八・一・一五・擲筆)